

〈論文〉

札幌大学法学部における囲碁教育

田中恒寿

はじめに

2007年度、札幌大学法学部の新カリキュラムにおける「自由演習」が走り始めた。法学科に所属するほぼ全教員が1講座ずつ担当し、それぞれが趣向凝らした授業を展開しているが、筆者は囲碁をテーマに入門教育と文化史に関するレクチャーを行った。本稿はその経験をもとにした経過報告である。第1章では日本の大学における囲碁教育の現状についてまとめる。第2章では囲碁の入門教育に関する実践例として、「東大方式」¹⁾とも比較しながら我が「自由演習」の内容を紹介する。第3章は囲碁の文化史について講じた概略である。特に文学にあらわれた囲碁に関しては、他ではあまり重要視されないテーマではないだろうか。

第1章 他大学における囲碁教育の実践例

お隣の韓国には囲碁学科やその大学院まで有する明知大学²⁾もある。一方、わが国では囲碁が正課に取り入れられている大学も未だ稀だ。

そんな中、東北大学(川島隆太教授)で囲碁による脳の活性化と教育効果の関連性についての研究³⁾が進んだことを受けて、たとえば同志社小学校では2006年度、三年生の総合的な学習の時間に囲碁が導入された。2007年度には二年生から四年生まで拡大するという⁴⁾。

比較的取り組みが先進的だったのは高校で、沖縄県立真和志高校では1998年から全国に

先駆けて囲碁・将棋を正課として取り入れている。

また東邦大学理学部情報科学科では2007年、日本棋院所属のプロ棋士、梅沢由香里女流棋聖を客員教授に迎えた。数理知能科学コースで授業の一部を担当するという。情報科学における問題解決能力の鍛錬に囲碁が役立つことを期待してのことだ。

さて、日本の大学における囲碁教育で時代を画することになるであろう試みは、2005年10月、東大において始動した。全学自由研究ゼミナール「囲碁で養う考える力」（兵頭俊夫教授担当）がそれだ。正規の授業として囲碁を学んで単位が取れるこの講座は、幸いなことに好評を博し、2006年度からは全学体験ゼミナールとして毎学期開講されている。そして、その成果が2007年の7月に兵頭教授とプロ棋士の石倉昇、梅沢由香里、黒瀧正憲の共著により、『東大教養囲碁講座』という形で光文社から紹介された。

同書によるとによると、この囲碁入門講座のバックボーンには教養学部附属教養教育開発機構の「教養教育への囲碁の活用」寄付研究部門（日本棋院・日能研）があり、その目的は以下の五点に集約されている。

1. 教養学部の全学体験ゼミナールで囲碁入門講座「囲碁で養う考える力」を開講します。
2. 本研究で開発されたプログラムを初等・中等教育にも普及させ、囲碁の教育的効果を広く社会に向けて発信します。
3. 囲碁の教育効果を、脳科学的、心理学的測定によって研究します。
4. 囲碁の楽しみ、教育的効果、囲碁文化の歴史などについて、シンポジウムや展示会を通じて紹介します。
5. 東アジア各国における囲碁教育プログラムと交流します。⁵⁾

大学での授業にとどまらず、囲碁の教育的効果の研究・発信まで視野に入れた壮大なプログラムである。

第2章 法学部「自由演習」における囲碁入門教育の実際

「自由演習」は、法学部で2006年から走り始めた新カリキュラムにおいて新たに設けられた法学科の科目だ。配当は第3、第4セメスター（2年次）。各講座は1セメスターで完結し、週一コマで2単位という設定である。法学部のカリキュラムに何らかの関連があるものであれば、内容は担当教員の自由裁量に委ねられる⁶⁾。

筆者の場合、単にゲームとしての囲碁のみならず、文化史的な観点、特に文学と囲碁との関連をレクチャーに交えることにより歴史や文学といった科目との関係付けをはかり、同時に囲碁の対局を通じて培われる論理的思考力を大看板として、囲碁の導入教育を自由演習の枠内で実践することを試みた。履修者は女性1人を含む14名で学生の人気は高かった。ちなみにそのうちの2名は囲碁の経験者で級位レベルである⁷⁾。

東大の全学体験ゼミナール「囲碁で養う考える力」では、囲碁初心者に対する効果的な教授法の開発・実践ということが主要な目的として掲げられていた。具体的には「東大教養方式の囲碁入門」というかたちでまとめられ、その教授法は次の三つの特徴を持っている。

1. 「石埋め碁」で囲碁のルールに慣れる。
2. 「決め打ち碁」で、布石の考え方を身に付け、初心者でもすぐに終局まで打てるようにする。
3. 「囲碁の心得」の形で、言葉を積極的に使って上達を助ける⁸⁾。

実際の授業計画として「東大教養方式」では、6路盤を用いた「石埋め碁」にはじまって第2回目にコウの解説があり、第4回目には9路盤による「決め打ち碁」へと進む。第7回には19路盤へと「決め打ち碁」が拡大し、第11・12回でシチョウ、ゲタ、ウツテガエシ、オイオトシといった技術を学んだ後には、いよいよ最終回で、プロ棋士との9子局指導後にのぞむ。

『東大教養囲碁講座』48ページにはこのプロとの9子局の棋譜が掲載されているが、まったくの初心者がわずか三ヶ月で10級のレベルをゆうに超えている。まさに驚嘆すべき上達スピードであり、「東大教養方式」囲碁入門プログラムの優秀さを実証するものといえるだろう。

一方筆者は、囲碁の導入教育に関する方法論的な持ち合わせは皆無であった。「石埋め碁」の理論的支柱となっている「純碁」のことは、知識としては知っていても、実際に試したことはなかったため、「自由演習」の中に取り入れようとは思いつかなかった。「決め打ち碁」にしても、格言等を利用した「囲碁の心得」にしても、非常に参考になる方法であるが、とりあえず、今回札幌大学法学部で、筆者が自分なりに試みた入門教育の概略を紹介しておきたい。

まずは6路盤を用いた「ポン抜きゲーム」からはじめる。相手の石の四方を自分の石で

囲めば、取り上げることができる。

これが理解できたら2週目は地の概念の説明。囲碁の「囲」は、相手の石を囲うことであると同時に自分の陣地を囲うことでもある。この二つの概念をうまく組み合わせながら作戦を立てることが囲碁では非常に重要だが、初心者にはなかなか難しい。

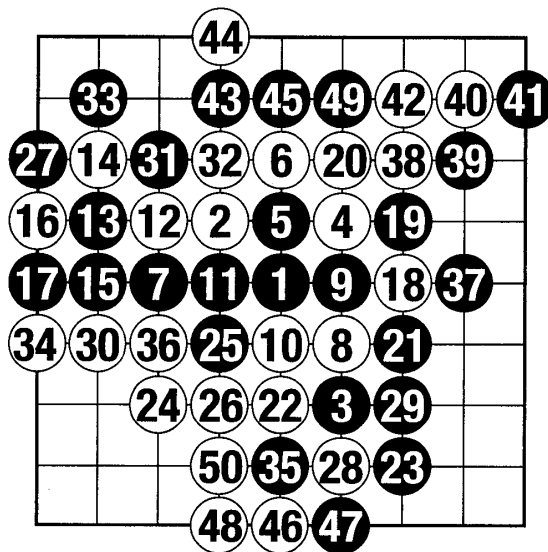
3週目で終局のしかた、ダメの概念を説明すれば、なんとか9路盤での対局が可能になる。

4週目以降は机上講習と実践対局の2本立てだ。コウのルールのほか、石の取り方のバリエーションとして、ゲタ、シチョウ、オイオトシ、ウツテガエシといったテクニックを、プリントの問題集で順次解説していくことになる。ちなみに問題集は、日本棋院発行の『基本がわかる囲碁トレーニング2・3』から適宜コピーして配布したが、基礎力アップには有効だったと思われる。

6週目、石の死活の基本を説明。ようやく囲碁らしくなってくる。

7週目、だいたい黙っていても全員が終局まで打つことができるようになったのを見計らって、一度9路盤による模擬大会を開催した。経験者2名を除いた12名が、6名ずつ、A・B二つのリーグに分かれ予選を行う。予選リーグは総当たりだから各人が5局打たなくてはならない。

8週目、それぞれのリーグの一位、二位が決勝トーナメントを行う。決勝トーナメントの対局は、見ている全員で棋譜をつけてもらい、対局後に並べなおして講評した。参考までに決勝戦の棋譜を紹介する。黒番が優勝したT君、白番が準優勝のN君だ。



9週目以降は実戦が主体となる。後述の文学に関するレクチャーや、死活、ヨセ、ワタ

りなどの練習問題を適宜絡めていくが、実力差が少しずつはつきりしてくるのもこの頃からだ。対局相手はランダムに選んでいくが、対局後に教え合ったりする光景も見られるようになってきた。

第3章 囲碁の文化的側面についてのレクチャー

札幌大学法学部の自由演習で筆者が試みた囲碁入門講座が、通常一般に行われるものと異なった独自性を持っているとしたら、授業時間の四分の一程度の時間を割いて囲碁の文化的側面についてのレクチャーを行ったことだろう。特に筆者の専門分野が文学であることから、囲碁とかかわりのある文学作品をいくつか紹介し、受講生に簡単な感想文も書いてもらった。

囲碁の文化史に関するトピックをいくつか挙げておこう。起源（中国説・インド説）、占いとの関係、用具（白石と黒石の大きさの違い、碁盤の「クチナシ」「血溜り」、正倉院蔵の木画紫檀碁局など）、琴棋書画の伝統、お城碁と家元四家、本因坊、囲碁の別名（手談、烏鷲、爛柯など）や囲碁に関する言葉・ことわざ（ダメ、岡目八目など）、世界の普及状況、世界囲碁選手権、プロのタイトル戦、コンピューターソフト・インターネット対局など、など。種本としては『囲碁の文化誌』や『囲碁の世界』が大いに参考になった。

今の大学2年生といえば、まさに『『ヒカルの碁』⁹⁾世代』であり、囲碁すなわちオジサン臭いゲームというステレオタイプからはだいぶ自由になっているが、アジアのみならず世界的に普及が進んでいる状況にはさすがに驚いているようだった。

つづいて文学に関してだが、取り上げた作品は全部で三点。川端康成『名人』（5週目）、シャン・サ『碁を打つ女』（9週目）、トレヴェニアン『シブミ』（11週目）だ。

まず最初はやはり川端康成の『名人』（1954年）をおいて他にはないだろう。最後の世襲名人である二十一世本因坊秀哉の引退碁（1938年）を、観戦記者だった川端康成が、秀才の死後、虚構をまじえてリライトした名作だ。対するは昭和の名棋士木谷実をモデルにした大竹七段。木谷七段（当時）は呉清源六段（当時）とともに人気を二分する打ち盛りの若手実力者で、この二人は「新布石」と呼ばれる画期的な布石法を編み出し、世の中をあっと言わせたばかりであった。秀哉名人は引退後に先立つ1933～4年、日本囲碁選手権に優勝した呉清源と対戦し、二目勝ちをおさめている。木谷實は新時代勢力の期待を背負い、満を持しての登場だった。

山場の一つである封じ手の場面に関しては、その仕組みについて十分に説明を加えたが、それでもなおこの封じ手の意味合い（単なる時間つなぎなのか、一手としての意味があるのか）までは初心者にはわかりづらいようだ。

感想文では、何日も缶詰状態になって一局を打ち続けることへの驚きや、勝負師としての秀哉名人の描きぶりに注目が集まっていた。蛇足ながら、川端康成という作家を今回はじめて知ったという学生がいたのにはさすがに驚いた。

続いてはフランスで活躍する中国人女流作家の新鋭シャン・サの出世作『碁を打つ女』（2001年）だ。この作品はフランスでも定評のある“高校生の選ぶゴンクール賞”を受賞しており、大学生にとっては共感を得やすいストーリーを持った作品ではないだろうか。

舞台は満州事変から日中戦争へと向かう時代、満州国にある架空の街千風。主人公はスパイとして中国側の動向を探る日本人青年将校と、抗日運動のシンパである地元の女子学生だ。二人は町の中心にある千風公園で碁の対局を通じて知り合う¹⁰⁾が、お互いに相手の素性は知らない。碁の打ちぶりから相手の技量や気性を推し量るほかないのだが、異性同士ということもあって、複雑な感情が絡み合い、それが盤上にも反映してくる。囲碁の具体的な技術上の問題については、あえて触れないのか、それともともと作者のシャン・サが囲碁にそれほど詳しくないのか、抽象的ではおかしな記述が多いが、人間心理の機微を囲碁に照らして描き出している点は興味深い。

最後はアメリカのハードボイルド作家トレヴェニアン¹¹⁾の傑作『シブミ』（1979年）を取り上げた。ロシア系テロリスト、ニコライの半生を描いた長編だが、アメリカの拝金主義と古い日本の内省的な精神文化を対比させ、日本文化論としても読み解くことの出来る、手ごたえのある作品だ。

上海の租界で育ったニコライは日本人の岸川将軍から囲碁の手ほどきを受け、将軍のはからいにより日本に渡って大竹七段（またもや）のもとで囲碁の修行をする。物語の展開に囲碁が印象的に絡んでくる箇所といえば第1部「フセキ」¹²⁾の後半、戦犯として囚われの身となった岸川将軍を面会室で殺す場面だろう。看守に悟られないよう、碁に打ち興じる振りをしながら囲碁の用語を巧みに駆使して将軍の本心を聞きだし、自殺のすべを奪われた将軍に代わって、ニコライが一瞬の早業により将軍の命を絶つのである。

タイトルが端的に示しているように、“渋み”という日本の伝統的な美学がこの作品の鍵であり、主人公のニコライが目指す境地でもあるが、それを体現するものの一つとして囲碁がクローズアップされている点は特筆に価する。呉清源も「六合（=宇宙）の調和」という視点で囲碁を捉えているが、ゲームとして相手に勝ちさえすればよいというのではなく、そこに深い精神性や美学を見出そうとする姿勢は、囲碁のたしなみ方としてもっと

アピールしても良いのではないだろうか。

おわりに

第1章で紹介したように、東大で起こった囲碁入門教育の動きが、今後他大学へ、さらには小・中・高等学校へと広まっていく可能性が高い。現に筆者の担当した「自由演習」でも、東大を先行事例として参考にさせていただいた。この点は大いに感謝したい。

第2章で論じた札幌大学での囲碁入門教育は、筆者の能力不足もあり、改善すべき点の多いものにとどまったかもしれない。今後一層の創意工夫を期するものである。

第3章で取り上げた囲碁の文化史的側面については、ゲームとしての囲碁の入門教育に不可欠の要素というわけではないが、大学教育の一環として囲碁を取り上げる上では重視されてよい分野ではないだろうか。大学にはさまざまな分野の専門家がいる。囲碁の切り口もさまざまあってよいのではないだろうか。

今回、「自由演習」の最後の締めくくりとして、受講者全員による真剣勝負の大会を催した。9路盤を使用し、スイス方式による4回戦の変則リーグだ。経験者2名も混ざっているため、一人に対しては先番コミなし、もう一人に対しては2子の手合い割で打ってもらう。スケジュール的に、通常の授業時間内ではこなせなかったため、定期試験が終わった直後に3時間ほど費やして行った大会だが、皆楽しめたようだ。筆者は対局組み合わせや点数計算に忙しく、棋譜取りを失念していたことが悔やまれる。優勝したH君には賞品として仏和辞典を進呈した。

大会終了後に行ったアンケートでは、この授業を通じて「思考力が付いた」という回答が目立った。「来年もやりたい」というような声もあり、囲碁の世界に触れることにより論理的思考力を磨くという所期の目的は達成できたとみなしてもよいのではないだろうか。9路盤での対局に終始したことについて、「19路盤でやってみたかった」という意見もあり、今後の課題であるが、時間的制約や用具の準備などの問題もある。

経験者の受講を認めるかどうか。受講者がコンスタントに10名を超えるようであれば、初心者に限定してもよいだろう。経験者がいればチューター的な役割を担ってもらうことができ、その意味では有益であるが、練習問題などはあまりに易しすぎ、別メニューで二面打ちの指導対局をしたり、二人で自由対局をしてもらったりしたこともある。経験者は教える側に徹してもらったほうが、面倒がないかもしれない。

「酒は別腸、碁は別智」という諺がある。どんなに満腹だろうが酒は底なしに飲めると

いう人がいる。まるでもうひとつ別の腸があるようだ。同様に、碁の強いのは頭の良し悪しに関係ない。まるで別の脳味噌で考えているようだ、との謂い。碁で頭が良くなるかどうかはともかく、集中力、論理的思考力、大局観などは囲碁以外のさまざまな分野、局面で応用可能な資質であり、学生が一度囲碁をかじってみるのも無駄ではないのではなからうか。

注

- ¹⁾ 東大の全学体験ゼミナールで採用されている成人初心者向け囲碁入門教育法を「東大教養方式の囲碁入門」と呼ぶ。具体的な特徴は第2章で後述する。
- ²⁾ 大阪商業大学はこの明知大学と友好条約を結び、2007年から囲碁をテーマにしたシンポジウムを開催している。ちなみに2007年のシンポジウムタイトルは「囲碁に見るビジネス戦略——人生は一局の碁なり」、2008年は「囲碁と人間の幸せ——過去の遺産を未来へ」となっている。
- ³⁾ 日本棋院が委託した研究（2006年1月～2007年4月）で、結果は次のように発表されている。「本研究の結果より、囲碁教室に通う子ども達が3ヶ月間の週1回1時間の囲碁を学ぶことによって認知機能が向上することが確認できた。囲碁教室に通うことによって幅広く前頭前野をはじめとする脳機能がより発達したためと考えることができる。」(<http://www.nihonkiin.or.jp/news/kawashima-report.pdf>)
- ⁴⁾ これとは別に、東京の八名川小など全国各地の小中学校で、総合的な学習の時間を利用した囲碁の授業を行っている例は多い。礼儀作法や集中力を高めるといった教育効果を期待してのことだ。
- ⁵⁾ 『東大教養囲碁講座』18～20ページ。
- ⁶⁾ 法学部自治行政学科にも類似の「基礎演習」という科目があるが、こちらは「専門演習」の基礎ということで、領域はおのずと限られる。
- ⁷⁾ 経験者の扱いは悩ましい。東大では初心者に限定していたが、定員300人のわが法学部で受講生がどれだけ集まるか読めなかったため、あえて制限はつけなかった。
- ⁸⁾ 『東大教養囲碁講座』26～7ページ。
- ⁹⁾ 週刊『少年ジャンプ』に連載された囲碁マンガ。これに刺激されて囲碁を始めた子供たちが多数いる。
- ¹⁰⁾ 御影石の小卓に碁盤が刻んであり、碁好きが集まって対戦相手を待っているという。このような「青空碁」が中国では一般的なのかどうか、筆者は詳らかでない。
- ¹¹⁾ 『シブミ』は全六部によって構成される小説だが、各部のタイトルには囲碁の用語が用いられている。

参考文献リスト

江崎誠致『呉清源』新潮社1996年
川端康成『名人』新潮文庫1962年

シャン・サ『碁を打つ女』早川書房2004年

トレヴェニアン『シブミ（上・下）』ハヤカワ文庫2006年

中山典之『囲碁の世界』岩波新書1986年

兵頭俊夫他『東大教養囲碁講座』光文社新書2007年

水口藤雄『囲碁の文化史』日本棋院2001年

『基本がわかる囲碁トレーニング（基礎編・初級編）』日本棋院2002年